

## ○まとめ

約2年間にわたる調査成果から想定される、調査地における皿川の流路の変遷は右図のように想定できます。古代（8～12世紀）・古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）・それより前、の3つの時期の旧流路が確認できました。

中でも、古墳時代後期・それより前の流路では、川岸や礫洲（礫でつくられる中洲）の20か所以上で、土器が発見されました。土器は完形（壊れていない状態）のものや、周囲に散らばる破片から完形に復元できるものが多数を占めています。また、同じ流路からは鉄器も10点以上出土しています。中でも小型農工具は、祭祀で使用される場合が多く、注目されます。さらに今年度の調査では、周辺に土器が散る火處も3か所確認されました。

これらの調査成果から、福田湯田遺跡で出土した土器や鉄器は、川に廃棄されたものとは考えにくく、水辺の祭祀に利用された可能性が高いと想定できます。遺跡の近くに立地する佐良山古墳群と遺跡の時期も近いことから、古墳群を築いた人々との関連も窺える興味深い事例と言えます。

第3図 調査成果から想定される流路の変遷(1/4000)

## 【福田湯田遺跡関連年表】

高度経済成長(1955～)	全国の動き															
	300年前	500年前	1000年前	1500年前	2000年前	5000年前	現代～明治	江戸	室町	鎌倉	平安	奈良	古墳	弥生	縄文	旧石器
明治維新政府の樹立(1867)	大政奉還(1867)	幕藩体制が敷かれる	江戸幕府が成立する(1603)	豊臣秀吉が全国を統一(1590)	室町幕府が成立する(1338)	美作国守護赤松氏が將軍を誅殺(嘉吉の乱)	江戸幕府が成立する(1338)	鎌倉幕府が成立する(1190)	平安京へ都が移る(794)	平城京に都が移る(710)	国分寺建立の詔(741)	朝鮮半島の様々な技術が伝わる	古墳を造り始める	稻作が始まる	弓矢や土器を使い始める	日本列島と大陸は陸続きに
第一次世界大戦始まる(1914)	第二次世界大戦始まる(1939)	高瀬舟が盛んに往来する	佐良山村ができる(1889)	佐良山村が鶴山に津山城を築く	森忠政が鶴山に津山城を築く	一方村付近で皿川の改修が行われる	比丘尼塚で断食し、宗教弾圧に対抗	宇喜多氏と毛利氏が美作諸城を争奪	高尾北ヤシキ遺跡で鏡像が埋納される	岡道東遺跡で集落が営まれる	佐良庄に美作国守護所(院庄館)が置かれる	美作國分寺・國分尼寺が建立される	佐良庄が山城國神護寺の所領となる	西奥田遺跡で堅穴住居がつくられる	天神原遺跡で石器が使われる	福田湯田遺跡周辺の動き
佐良山村が津山市に編入する(1941)	皿川の氾濫で大きな被害が出る(1998)	佐良山村ができる(1889)	佐良山村が津山間に鉄道が通る(1898)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	(丸山城・嵯峨山城・皿山城)	



## 一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

ふくだゆだ

# 福田湯田遺跡 現地説明会資料

【日時】令和8年1月27日(火)

10:00～15:00

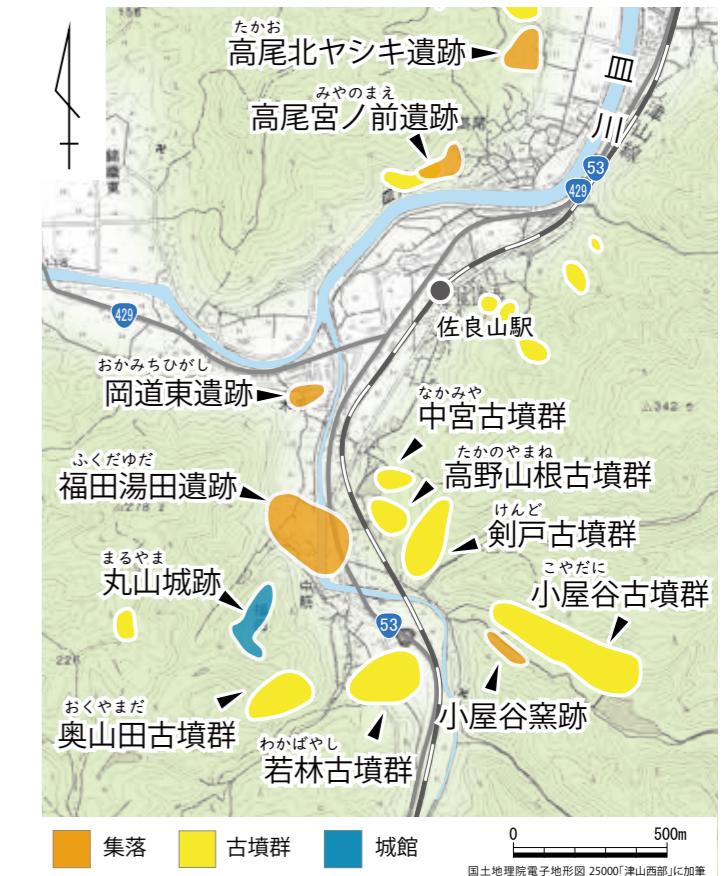
【場所】津山市福田 福田湯田遺跡発掘調査現場

【主催】岡山県古代吉備文化財センター

## ○はじめに

岡山県古代吉備文化財センターでは、一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴い、平成29年度から発掘調査を開始しました。令和6年5月からは、福田湯田遺跡の発掘調査を行っています。

調査地は吉井川の支流である皿川の東側に位置します。遺跡東側の丘陵には、高野山根2号墳(残存長37mの前方後円墳)をはじめ、6～7世紀前半の群集墳(小規模で密集した古墳)である佐良山古墳群の支群が築かれています。今年度は国道53号西側の4区、東側の5・6区を対象に調査を行っています。調査成果として、調査区の西側を北流する皿川の、古墳時代後期から古代(奈良・平安時代)にいたる流れの変遷が分かってきました。



第1図 調査地周辺の主な遺跡分布図(1/25,000)



写真1 調査地遠景(南から)

## ○今年度の調査成果

### 【古代以降】

古代（奈良・平安時代、約800～1,200年前）以降になると、青色で示すように、流路は調査区の東側へと変化していきます。以前川だった部分は少しづつ土砂が堆積し、地盤が安定していくと考えられます。古墳時代後期以前の流路があった4区では、古代以降に作られたと考えられる掘立柱建物（穴を掘って柱を立てた建物）が2棟見つかりました。



#### ①掘立柱建物

時期：古代以降

いずれも2間×2間の掘立柱建物。  
建物の外壁に沿って柱を立てる側柱建物（写真奥）と、内側にも柱を立てる総柱建物（写真手前）の2種類が見つかりました。



#### ④鉄器（小型農工具）

時期：古墳時代後期

小型農工具（祭祀で使用される、形を小さくした模造品）が見つかりました。写真は斧の模造品と考えられ、長さは約4cmです。

### 【古墳時代】

古墳時代後期（約1,400年前）には緑色、それより前には黄色で示した部分を皿川が流れていたと想定されます。古墳時代後期頃の皿川では、川岸や礫洲（礫で作られる中洲）に、土器や鉄器が置かれている様子が、約12か所で確認されました（右図★印）。また、4区では礫洲の上で火処（火を焚いて地面が焼けたところ）が3か所見つかりました。



#### ②火処

時期：古墳時代後期以前

礫洲の上で、火を焚いた痕跡が見つかり、焼けた土などが堆積していました。近くには蒸し器である甑や煮炊きに用いる甕の破片が散らばっています。

#### 4区



#### ③配置土器（杯身）

時期：古墳時代後期以前

川岸付近で、須恵器の杯身がほとんど完形で出土しました。近くには他にも杯の破片が散っていましたことから、複数置かれていた可能性が考えられます。



#### ⑤配置土器（甕）と鉄滓（写真○印）

時期：古墳時代後期

古代の流路の下から、古墳時代後期の川岸付近で、土師器の甕の破片と鉄滓が出土しました。



#### ⑥配置土器（短頸壺）

時期：古墳時代後期

須恵器の短頸壺の破片が比較的まとまって出土しました。礫洲の先端付近に置いてあったものが転落したと思われます。

第2図 主な遺構・遺物と、調査成果から想定される流路の関係(1/400)